

永遠の命の希望説教③

イザヤ書 25章7節～10節

主はこの山ですべての民の顔を包んでいた布とすべての国を覆っていた布を滅ぼし死を永久に滅ぼしてください。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい御自分の民の恥を地上からぬぐい去ってください。これは主が語られたことである。その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってください。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。主の御手はこの山の上にとどまる。

コリントの信徒への手紙一 50節～58節

兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜う神に、感謝しよう。わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずですよ。

1. 主は死に打ち勝たれた

本日も、永遠の命の希望という主題で御言葉を聞いてまいります。本日の説教題は「勝利者キリスト」と付けました。何に対する勝利かという、何よりも、死に対する勝利であります。他にも言うことができるとすれば、罪に対する勝利。あるいはサタンに対する勝利とも言えると思います。死に対する勝利、という言葉からわかることは、死という、命が途絶えてしまうというありさまは、本来、神の創造の御心にはなかったものであり、人間が死に向かう存在であること。罪とサタンの支配の中で死に向かうものであることは当然のことではないということでもあります。あたかも、死ぬことは当然のことなのだから、それをいかに諦めるか、ということ論するような宗教もあると思います。しかし聖書は、死を当然のことと考えてはおりません。死はアダムの背反によって入って来たものでありますが、本来神は人間を死ぬものとしてはお造りにならなかったのです。私たちは、生まれつき、死ぬことをどうしても恐れるものであります。私自身も、信仰を与えられたきっかけは、子供の頃から、死ぬことを恐れていた。そこから、死を乗り越える希望として神を信じようと思ったのです。しかし、そのような死を恐れるわたしたち、死の棘である罪の中に苦しみもがく人間を憐れみ、罪と死から。そしてサタンの支配から御自身の恵みの中に移そうとしてください。そこに神の御子キリストの降誕の意味があります。福音書を読み進めて行きますと、死の力の中で苦しみ嘆く人間の中で、共に悲しまれ、それ以上に死の力に対して憤っておられます。主は、ナインという町に行かれた時、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出される時、深い悲しみの中嘆いている母親に深く憐れまれ、「もう泣かなくともよい」と言われました。そして「若者よ、あなたに言う。起きなさい」そう言われた時、死んでいたはずの一人息子がよみがえったのであります。(ルカ7章)

また、主イエスの女性の弟子であったマルタとマリアの弟、ラザロが死んでしまった時には、そこにいた人々が死の力に圧倒されて、為すすべもなく嘆いていることに憤りを覚えられた。そして父なる神に祈りました。「あ

あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです」そう言ってから「ラザロ、出て来なさい！」と大声で叫ばれた。するとラザロはよみがえった。四日も経っていたにもかかわらず。(ヨハネ 11 章) この二つの物語でわかることは、主イエスは、死の力に為すすべもなくいる人間を深く憐れんでくださっていること。そして死の力を敵視し、心から憤られ、死の力を滅ぼしてくださったということでもあります。主イエスはまさに、この世界に働く死の力を滅ぼすためにこの地上に降誕されたのです。主イエスはあるとき弟子たちに言われました。

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」世に、つまりこの世界に働く罪の力、サタンの力、そして何より死の力に勝っている。それがわたしたちの主イエス・キリストである。この主イエスの勝利は、十字架と復活によって確かなものとなりました。

ハイデルベルク信仰問答の問 45 にこのようにあります。「キリストの『よみがえり』はわたしたちにどのような益をもたらしますか。答え「第一に、この方がそのよみがえりによって死に打ち勝たれ、そうして、御自身の死によってわたしたちのために獲得された義にわたしたちをあずからせてくださる、ということ。第二に、その御力によってわたしたちも今や新しい命によびさまされている、ということ。第三に、わたしたちにとって、キリストのよみがえりはわたしたちの祝福に満ちたよみがえりの確かな保証である、ということです。」

この信仰問答にありますように、私たちが永遠の命の希望に生かされていくために心にいつも留めておきたいことは、主イエスは死に打ち勝たれたということ。私たちがその勝利に与っているということでもあります。永遠の命とは、主イエスが勝ち取ってくださった命に生かされているのだということです。私たちが意気消沈したり、過去を振り返りたくなかった時には、このことをよくよく考えたいのです。わたしの人生は勝利とは言い難いかもしれない。後悔や失敗の多い人生かもしれない。いやしかし、私の人生は主イエスの勝利の中にあるのだ。主が死に打ち勝ってくださって私を神の民としてくださったのだ。私の罪は全て赦されている。そして私はキリストと共に新しい命に生かされているのだ。このことを深く受け止めたいのです。

2. 聖書が私たちの内に実現する

さきほど、コリントの信徒への手紙一、第 15 章の 50 節から 58 節を読んでいただきました。51 節に注目したいと思います。「わたしはあなたがたに神秘を告げます。」口語訳聖書では、「奥義」という言葉で表現されており、英語でミステリーという言葉がありますがその語源となった言葉であります。ですから、やはりパウロの語り方も急に、不可解な、不思議な語り方になっております。まるで夢で見た幻のようなことをあえて説明しているようです。具体的に語っているように見えて、しかし頭の中でイメージしにくいものであります。パウロは、いわば新約聖書の教理体系の基礎をつくった人でもありますから、信仰について非常に理論的に語ることできる人でありましたけれども、同時に、異言で祈ることもできた人ですし、生きているときに、第三の天まで霊に導かれて、天の栄光を垣間見るといふ、普通の人の経験できないような霊的な体験をした人でもありますから、あるいはここで語られている将来の人間のよみがえりについての神秘も、パウロにだけ特別神様が啓示してくださった神秘的なのかもしれません。その神秘とは何か。「わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。」しかしこの箇所は、ヨハネの黙示録のような描写で語られます。最後のラッパが鳴ると共に、一瞬に異なる状態に変えられる、とあります。本当にラッパなのか。ラッパのような壮大な音が鳴り響くのかはわかりません。この、ラッパという表現は、黙示録 8 章でも七つのラッパと言われておりますし、マタイによる福音書でも、世の終わりを告げるラッパという表現がありますから、(24 章) ラッパが鳴る時という意味は、神がこの世界の主として終わりを告げる日が来るということでもあります。そしてそのときには、神が私たちが朽ちる体から、朽ちない体に変えてくださるのだということでもあります。大切なことは、私たちが、朽ちる体から朽ちない体に変えて

くださるのは神であるということです。その全能の力でもって。そのように聖書が語っていることをただ素直に信じるだけです。カルヴァンは、このような、死後の命のことについては聖書自身が詳しく語っていないのだから、あまり詮索する必要はないのだと語ります。ただ、わたしたちの命はもう神の御支配の中で守られているのですから、安心して委ねればよいのであります。わたしたちが注目して聞きたいのはこのあとに続く言葉であります。

「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着る時、次のように書かれている言葉が実現するのです。死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」(54-55) この言葉は、さきほど読んでいただきましたイザヤ書の第25章の「死を永久に滅ぼしてください。」という御言葉が元になっております。少しニュアンスは違いますが、死が勝ち誇っていたように見える中でしかしそうではない。神が死に勝ってください。そして永久に滅ぼしてくださいなのです。神が死に勝利するという事は、死を永久に滅ぼしてくださいということでもあります。

その続きにあります「死よ、お前のとげはどこにあるのか。」という御言葉の引用はホセア書の第13章14節「死よ、お前の呪いはどこにあるのか。陰府よ、お前の滅びはどこにあるのか。」ここでは、呪いとなっております。ホセアは、死には呪いが潜んでいると言います。なぜ私たちが死をどうしても恐れてしまうのか。死は罪の結果だからです。先週も伝えましたが、ローマの信徒への手紙の第6章でパウロは語ります。「罪が支払う報酬は死です。」死は、罪の結果です。その意味において、死の棘は罪であります。多くの棘を持ち、その棘に苛まれながら、死に向かっている。それが人間です。しかしその棘をことごとく主イエスがとりのぞいてくださった。私たちは棘のない死。呪いのない死を死ぬ。だから、私たちの死は、痛みとか、辛さが伴うものであってもなお確かに言えるのです。わたしたちの死は、神の祝福の内に逝く死であり、希望をもって死ぬことのできる死なのです。必ず、天の栄光に与ることができる死を私は死ぬのだと。たとえ、誰かに殺されるような死だとか、兵士として戦地に向かって一瞬で殺されるような死であったとしても、交通時事故で死ぬことがあったとしても。どんな死でも、キリスト者の死には、神の祝福が伴うのです。なぜなら、私たちの人生は死に至るまで神のものだからです。そういう死を死ぬことができるようになるために主イエスは十字架におかかりになり、復活してくださいました。そのことを信じて喜ぶだけなのです。パウロはここで語っているのは、こういうことです。この凱歌を歌えるということは私たちの内に、この言葉が実現したのだ。聖書の福音が私たちの内に生きている証拠なのだ。天国の神秘について、もしも誰かが、聖書に書いていないことを新しい啓示だと言って、詳しく語ったとしても、それは、異端でしかありません。聖書の中にある66巻の書物によって神の啓示は終わっている。伝道者に求められるのはこの66巻の意味を説き明かすだけなのです。この聖書の御言葉66巻が、今すでにここにいる私たちの内に実現している。皆さんの内に、死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。この言葉が実現し、そのような大きな凱歌を歌うことが許されている。葬儀の時に、わたしたちは愛する家族や信仰の友が亡くなったとき、本当に辛く悲しいのですが、その悲しみの中でなお、その友がキリストの勝利に与って天国に凱旋していったと言うことを信じて、感謝して賛美の歌を歌うことが許されているのです。そして、わたしたちもその勝利の歌を歌いながら日々を歩むことが許されるのです。私たちのために死に打ち勝ってくださいました主イエスの御業に感謝して喜び、それゆえにこのわたしも主イエスの命に与っているのだと信じることを。福音を信じる私たちの内に永遠の命が実現しているのであります。

パウロは、このような凱歌を歌うことを勧めているだけではありません。最後にこのように語ります。「こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずですよ。」わたしたちは、死が本当に近づいていることを悟ったとき、きっと動揺するのではないのでしょうか。心穏やかではおれないのではないのでしょうか。しかし動かされてはならない。主の御業に常に励みなさい、とパウロはわたしたちに語りかける。なぜならわたしたちの命は神の内に隠されているからです。(コロサイ3章3節) 隠されているということは神によって保たれ、守られ、いずれ祝福を受ける日が来るのだということです。これまで歩んできたことが空しく終わる

のではないか。人生は歩く影法師のように空しく、つかむことのできないものだった。人生の晩秋に至り、そういう思いを世の中の多くの人々が感じているかもしれない。しかしわたしたちの歩みはそういう空しいものではない。なぜならわたしたちは死に対して、お前の勝利はどこにあるのか、おまえの呪いはどこにあるのか、と言えるからです。皆さんの人生の一日たりとも主の知らない日はありません。そして皆さんが空しい日を過ごしたと思えるような日々があったとしてもそれもまた神の永遠の御計画の内にやはり意味のある日々であり、主がそこにもいましたもう日々であったのであります。だからわたしたちはいつも目の前を見据えつつ、今を生きて行きたいのです。今をつかんでいきたいのです。主がわたしたちに、与えてくださった今日という日を喜びつつ歩む。ここに永遠の命の喜びが確かにあるのです。お祈りをいたします。

教会の頭であられる主イエス・キリストの父なる御神様。あなたがわたしたちのために死に打ち勝ってくださいましたことを心より感謝いたします。あなたが私たちの人生から呪いと棘を抜き去り、祝福と恵みの中に生かして下さっていることを感謝いたします。主よ、あなたの勝利を信じて、わたしたちもまた凱旋の歌を歌います。キリストは復活された。イースターだけではなく。一年を通して私たちはこの喜びの中に。主の命の中に歩みます。主イエスが復活されたから、わたしたちも復活する。すでに信仰においてその恵みに与っております。だから今週も、あなたの恵みの中で、あらゆる心配事も、いら立ちも、うまくいかないことも、主におゆだねする信頼に生きることができるよう。主が共にいてくださる人生が空しくはならないことを本当に信頼させていただきますように。闘病生活をしておられるすべての兄弟姉妹に、主の慰めと励ましがありますように。諏訪教会の伝道の業を祝福して下さいますように。礼拝のために奉仕をして下さる方々を祝福して下さいますように。諏訪教会に連なる全ての兄弟姉妹の上に主が御摂理の中で豊かに導いてください。あなたの時があることを信頼します。求道者の方々をとらえ、導いて下さいますように。ウクライナとロシアの上に、あなたの確かな導きがありますように。コロナ禍が相変わらず続いております。一人一人のご健康をお守りくださいますように。言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン